

わがまち「竜王」を 輝かせる人々

～2016年 竜王町「こうりゅう さと交竜の郷あえんぼ賞」受賞者の皆さん～



昨年11月5日、「交竜の郷あえんぼ賞」の表彰式が行われ、選考の結果を受けて、1団体、4個人が受賞されました。竜王町では、私たちの周りで、広く地域を支える奉仕活動や社会に貢献する活動、人知れず地道で心温まる活動、他の模範となるような善行活動などを行っている人・グループに深く感謝し、町民の皆さんの心豊かな住みよいまちづくりへの参加が広がることをめざします。

美

まちの美しい環境に関する分野

西村 喬昌 さん
にしむら・たかまさ

【鵜川】



今も毎年美しい花を咲かせる姿が見られる鵜川天満宮の鳥居前の老桜を手入れされるほか、参道にアジサイを植樹、参道下の休耕田に花桃の苗木を植樹され、樹木の保護と環境整備をされている。



鵜川天満宮前の老桜

毎年、町内でも一足早く花を咲かせることで知られる鵜川天満宮の老桜は、平成15年に老木となって瀕死の状態であったところを、西村さんを中心とした有志のメンバーによって治療を施され、よみがえった奇跡の名桜として区民の皆さんで大切に見守られています。「趣味で庭作りをしていて、樹木医の勉強をしていたことが生かされました」と話される西村さんは、趣味で培われた経験をもとに桜の手入れをはじめ、地区内の寺院の名松の手入れや同天満宮の参道へのアジサイの植樹、その参道下の休耕田への花桃の植樹など、地域の環境美化整備活動を積極的に行われています。「参道は竹が覆いかぶさって薄暗かったんですが、アジサイを植えたら明るい雰囲気になりまして、それからその下の休耕田も草が生茂っている状態では何かした

いと思い、切り開いて花桃と桜を植えました」と、灌木や笹・つるを取り払う大仕事をこともなげに話される西村さん。実は壮大な計画を立てておられるそうで、「まず、春には花桃の花が咲き、次に桜が咲く、それから梅雨にはアジサイが咲き、秋になるとモミジやツツジなどの樹木が紅葉をつなぎ、みんなが季節の花を楽しむ場所ができんやろかと思って、今一生懸命みんなとやっています」と、将来はカメラを持って訪れてもらえる地域みんなの憩いの場をめざして、活動への歩みを生き生きと語られます。すでにアジサイの開花時期には道行く人の目を楽しませており、数年後には花桃の花が咲き乱れることを想定して環境美化整備を着実に進められています。四季折々に自然の彩りが楽しめる身近な観光スポットの誕生に期待が集まっています。



日野川堤防や区内の空き地、農村公園周辺などの草刈りや樹木伐採を自主的に行われ、また集落内の天神社にある用具倉庫の壁や屋根の修繕、空き家利活用の第1号モデル「ひだまり学舎」の修理・補修作業にも積極的に協力された。



伐採作業に精を出される岡田さん

平成18年から、日野川の堤防や区内の空き地、農村公園周辺の草刈りを自主的に行い、電線にかぶる樹木があれば枝払いや伐採を10年にわたり行ってこられた岡田さん。ほかにも、集落内の天神社にある用具倉庫が傷んでいるのを見ては壁や屋根の修理を無償で行われ、「見返りを求めず、進んで活動されている」と、区民の皆さんからも厚い信頼を寄せられています。最近では同地区内の古民家を改築し、地域交流の場として開設された「ひだまり学舎」の改修作業を、竜王町地域おこし協力隊と共に約1年かけて終わらせたばかりとのこと。当時を振り返りながら岡田さんは、「初めは、中は家財道具がそのままやし、屋根は下から見たら空が見えるしで、こんな出来なのかと思うて往生しましたわ」と、30年間空き家となっていた改修

作業は、粗大ごみ回収から屋根の修繕作業まで想像以上に体力のいる大仕事となったそうで、「それでもなんとかみんなのおかげで、見違えるほど立派になって、みんなでがんばったなあと喜んでました」と、昨年10月末に開かれた完成お披露目会では、区民の皆さんと一緒にその喜びを分かち合われました。区民同士が協力し合い、大きな目標を達成し、その喜びを共有できたことが何よりもうれしかったと話される岡田さん。「これが林のいいところ」と、地域のため、人のための地域活動への活力はふるさとを愛する心から生まれています。今後もますますの活躍を期待されている岡田さんは、「体力の続く限り間に合うたら、させてもらいます」と、控えめながらも、頼もしげに笑顔を返されていました。



平成24年から高齢者の集いの場となるコミュニティカフェを開き、認知症予防や介護予防に取り組まれている。中でも一人暮らし高齢者や障がいのある人にも参加を促し、活動の手伝いをしてもらうなどして、区民間の交流も図られている。



気軽に交流を楽しむ参加者

人間関係などの希薄化が社会問題になる中、地域の人たちが集まる居場所を提供することを目的とした「コミュニティカフェ」が竜王町内でも続々と開かれ、今注目されています。中でも町内でいち早く開かれたとされる新村地区の「カフェ福・福」は、認知症予防のためのコミュニティカフェとして公民館で月2回開かれ、区民同士がお茶を飲みながら、おしゃべりを楽しまれています。新村地区では、高齢化に伴う認知症高齢者や独居高齢者などの増加が地域課題となっており、同地区内で開かれた認知症予防の研修会で『閉じこもらないこと、人とコミュニケーションを取ることが大事』と学ばれたことを機に、平成24年に「カフェ福・福」を立ち上げられました。同カフェ代表は、「高齢者の方に話を聞くと、おたっしや教室に行きたくて

も体操ができないから行けないことや、本当はみんなとおしゃべりしたいことを話されていて、それなら、もっと気軽に集まれる高齢者の居場所を作ろうと思ったんです」と、当初は女性5人のメンバーで、閉じこもりがちな高齢者や障がい者、一人暮らしの高齢者に声を掛け、参加を促されました。現在ではメンバーも8人に増え、参加者にも活動を手伝ってもらいながら区民同士の交流を図られ、人と人、地域と人を結ぶ役割として、なくてはならない存在となっておられます。「公民館で手作りのおやつを作ったりして、みんな和気あいあいとやっています」とスタッフの皆さんも楽しんで参加されています。カフェでつながる温かい人間関係の絆が、さらにコミュニティを強める場所となっています。

学

学びに関する分野

藤田 真美子 さん

ふじた・まみこ

【西川】



「子育てサロン」や「おり紙教室」などにおいて趣味活動を生かした手芸やイベントなどを企画し、地域の福祉活動に貢献される。特に、ふるさと竜王夏まつりの盆踊り大会では、盆踊りの衣装制作などを手掛けられ、毎回上位受賞されている。



盆踊り大会では、個性光る衣装やメイクで出場

平成20年から西川地区の自主活動団体「なでしこサークル」で、手芸の指導者として活動されている藤田さんは、その特技を生かし、区内の子育てサロンで子どもたちが喜ぶ手作りのプレゼント企画を立てられたり、おり紙教室で手芸体験を行ったりと地域福祉活動を積極的に行われています。「自分も楽しみながらと思ってさせていただいたので驚きました」と受賞を喜ばれる藤田さん。その器用な指先は、地域のさまざまなシーンで頼りにされ、例えば、竜王町文化祭ではみんなで一つの大きな作品を作り上げ、また、ふるさと竜王夏祭りでは盆踊りの作品の企画・製作に携わり、衣装制作などを手掛けられています。そのデザインは毎回上位入賞を果たされており、西川地区の名声を広められ、区民の誇りとなっています。「盆踊りの

仮装アイデアはみんなで、ものすごくがんばって出されていて、私はその仲間に混ぜていただいて、得意分野で協力させてもらっています」と謙遜されるも、藤田さんの存在なくしては成り立ちません。「趣味を生かして、これまで話したことがない人とも出会い、自分の視野も活動の輪も広がります」と、うれしそうに話される藤田さん。趣味活動から地域活動を通じて、多くの人との出会いは同時に新しい自分との出会いにもなると話されます。また、「行事が終わるたび、次はどうしようかと、すぐに話してます」と、アイデアを練ることも楽しみの一つでもあるそう。今年は2年に一度の町の文化祭と夏祭りが開催される年。今年も藤田さんをはじめ、西川区民皆さんの力を結集し、作品作りに挑まれます。

安

生活の安心・安全に関する分野

菱田 立治郎 さん

ひしだ・りゅうじろう

【駕輿丁】



地域内でのスクールガード活動が始まる以前から子どもたちの通学の安全確保のための見守りを自主的に実施され、活動を通じて相互の信頼関係を高め、子どもたちが安心できる環境づくりとなっている。



毎朝の登校時の風景

子どもたちの安心安全の確保のため、地域の大人たちが通学路などに立ち、登下校を見守るスクールガード活動は、今やこの地域でも見られる風景となりました。これを自主的な活動として10年以上にわたり続けておられるのは駕輿丁地区にお住まいの菱田さん。地域内でスクールガード活動が始まる以前から取り組まれており、平日は毎日、登校の集合場所から県道交差点付近まで付き添い、子どもたちの安全確保に努めておられます。「ある朝、登校前の子どもたちに『おはよう』と言うたら『おはよう』と返してくれたのが、元気がもらえたみたいでうれしくて、気が付いたら毎日続けるようになっていました」と、活動の始まりをうれしそうに振り返られる菱田さん。「子どもらの名前を呼んであいさつすると話し掛けてくるように

なって、卒業してもあいさつしてくれるわ」と、毎朝の子どもたちとの関わりを楽しそうに話され、活動を通じて温かな人間関係を広げるとともに、子どもたちの成長も見守られてきました。毎朝7時半には登校の集合場所に向かわれる菱田さんですが、「朝、新聞を読んでも、家内に『お父さん行かなあかんで！』って言われて急いで行ったこともあるわ」と苦笑い。しかし、「長いこと続けてこられたのは家族に応援してもらっていたおかげ」と家族への感謝の気持ちを語られます。また、長年におよぶ活動は、地域からの信頼も厚く感謝の念も堪えません。「まだまだ行けるまで行きます」と頼もしげに話される菱田さん。これから子どもたちの姿を優しく見守る菱田さんの姿が、駕輿丁地区の朝の風景として続きます。